

## セクシュアリティとジェンダーの パフォーマンス

：Split Britchesのレズビアン演劇

外岡尚美

ジェンダー セクシュアリティ  
性別と性的欲望は、生物学的身体に根ざした個人の本質的アイデンティティの一部であり、私的な領域の問題だと考えられている。しかしいずれもが実は、歴史的・社会的に構成されているだけではなく、社会全体の権力関係を組織化する結節点として作用しているということは、1970年以降のジェンダー研究とセクシュアリティ研究で明らかにされてきた。性別（ジェンダー）またはエロティックな欲望や行動（セクシュアリティ）の形が、ある人を特権化したり、また別の人に負の烙印を押ししたりすることが知られている以上、そのような権力関係が「自然」なものではないということを明らかにし、その権力関係がどのように組織化され、どのように作用しているかを研究することが、演劇を含むあらゆる分野での重要な研究領域となっている。第一に必要なのは、性別や欲望を身体的本質（自然）から切り離し、その社会構成的側面を浮かび上がらせることだった。

この視点からジェンダーとセクシュアリティの定義を述べれば、次のようになる。ジェンダーは性差が社会的に組織化されたものであり、身体的差異がいかなる意味を生ずるかについての知識の総体である。身体に対する社会的意味づけのことであり、人との関わり方、行動規範、身振りなども含む。セクシュアリティは「性現象」とも訳されるように、エロティックな欲望、実践、アイデンティティを含む、「性をめぐる概念と欲望の集合」（上野千鶴子）と定義できる。

演劇研究においてこの二つの領域に対する研究が飛躍的に進んだのは哲学者ジューディス・バトラーの『ジェンダー・トラブル』（Gender Trouble, 1990）の出版が契機となっている。バトラーはジェンダーが、「様式化された行為の繰り返しを通して時間の中で構築され、外的空間の中で制定されるアイデンティティ」（140頁）、すなわち行為が遂行的に構築されるものと規定した。「男らしさ」や「女らしさ」が日常の行為の繰り返しで構築されるとしたら、男と女（あるいは男と男、女と女）のエロティックな欲望、実践、アイデンティティ（すなわちセクシュアリティ）もそのジェンダーを構築する繰り返しの行為によって組織化されることになる。

「行為」に焦点を合わせるこの見方によって、舞台での身体行為を、ジェンダーとセクシュアリ

ティが社会的に構築される一つの契機として見るのが可能になったのである。特にアメリカのゲイ演劇には、ドラッグ・クイーン（女装した男性）を典型とするような、パロディと誇張を主体としたキャンプと呼ばれるスタイルの伝統があるが、このスタイルがまさに、社会構成体としてのジェンダーのあり方を浮かび上がらせる行為だととらえられるようになったのである。ドラッグは女らしさを強調し、過剰に模倣することによって、逆に女らしさがそもそも模倣可能な行為の集積であること、「ジェンダー自体が模倣的構造を持っていること」を明らかにする（バトラー、137頁）。このようなパロディは、「自然な」ジェンダーと「コピー」との乖離を浮かび上がらせるが、それが同時に「本当のもの」や「自然なもの」が実はパフォーマンスの効果にすぎないことを明らかにするのである。

80年代以降のアメリカのレズビアン演劇を代表するグループ、スプリット・ブリッチズは、これまで述べたようなジェンダーとセクシュアリティとの模倣的構造を舞台上で明らかにするだけではなく、ジェンダーとセクシュアリティを男と女という模範的で「自然」と見なされる枠組みから解放する。たとえばパネルディスカッションの際ビデオで御覧いただいた作品、『貸賃用礼服』（Dress Suits to Hire, 1988）の一場面では、一人の女性ももう一人の女性を誘惑する。誘惑する方は、白のスリッパ姿で、ステレオタイプの女の誘惑の身振りをしてみせる。もう一方は、身体と黒のロングドレスは女性的だが、誘惑されたときの身振りや、反応、行為は男のものだ。ジェンダーの点から見れば、この場面は「女らしさ」と「男らしさ」が一種の着脱可能な文化コードであることを浮かび上がらせる。またセクシュアリティの点から見れば、一見自然と思える男と女の間関係を、女同士が模倣し繰り返すことによって、その「自然さ」がやはり文化コードとして組織化されているものであることを浮かび上がらせている。

女らしさが社会構成的なものにとらえなおされたとしても、それがしばしば男性に対する一種の反動形成であるとしかたとらえられないのが現状であり（女らしさのマスカレード論が良い例である）、女性のセクシュアリティについても同様のことが言える。スプリット・ブリッチズはジェンダーも欲望も、異性愛体制の枠組を借りながら、なおその外側に位置するものとして提示する。それは女性を取り得るポジションが男性に対する反動としての「女らしさ」だけではないことを示し、ジェンダーと欲望を男と女という二項対立的枠組みから解放することによって、社会全体の権力関係を組織化する結節点として作用するジェンダーとセクシュアリティに対する、より先鋭な視点を提供してくれるのである。